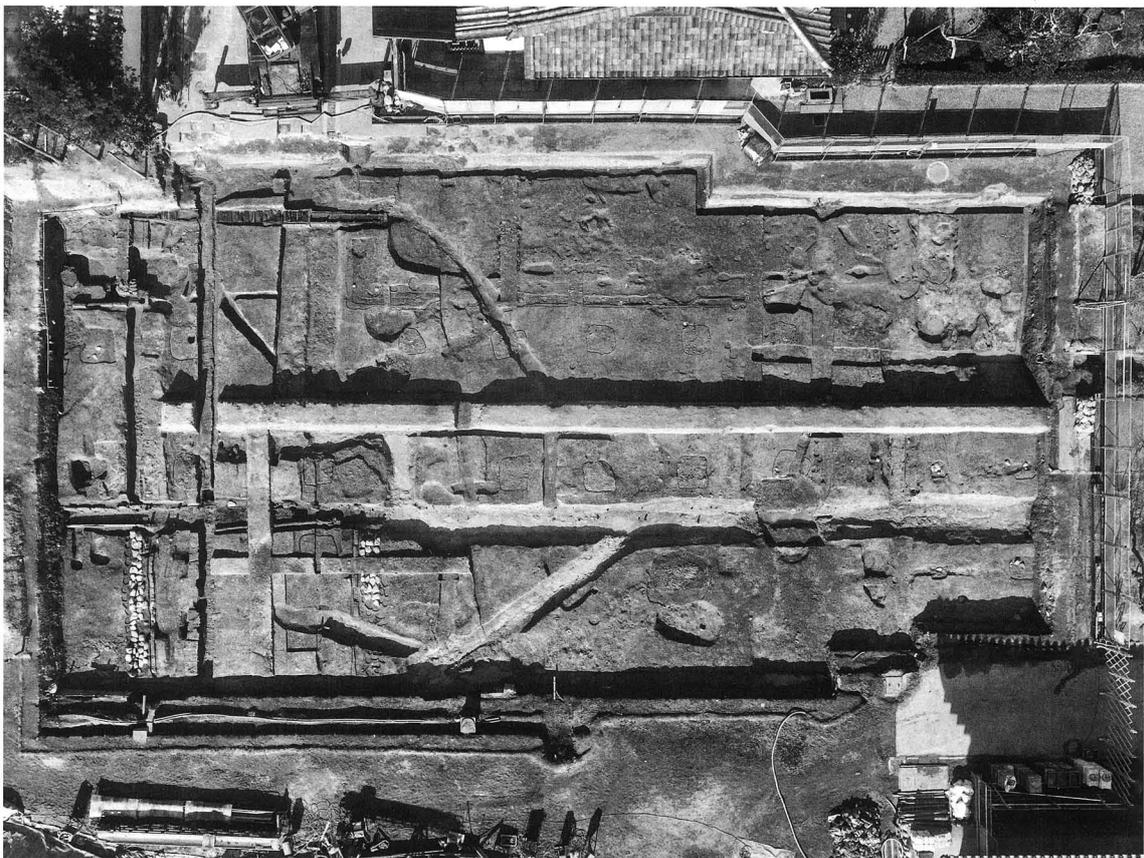


3 検出遺構

(1) 調査前の地形と基本層序

調査前の地形 調査対象地域は、薬師寺中心伽藍への北方からの参拝者入口である與楽門からつづく参道に該当する部分である。石畳で舗装された参道の両脇には、石垣で整えられた盛土の上に多数の樹木が植えられていた。それ以前は、山田法胤管主によると、調査区付近を南北に貫く寺内道路が走っており、その東側は水田および耕作地、西側は耕作地や雑木林であったという。また別の聞き取りによれば、昭和年間には駐車場として利用されていた時期もあったとのことである。

基本層序 前述のような近現代における土地利用のため、基本層序は調査区の東西で大きく異なる。近現代の耕作により上部を削平された東半部では、近現代の整備盛土（厚さ約60cm）および耕作土（約30cm）の直下に、瓦片を多量に含む時期不明の包含層（約20cm）、その下に遺構検出面である整地土（約10～30cm）が堆積し、地山に至る。西半部の基本層序は、表土（約20cm）、近現代の整地土（約60cm）、十字廊の基壇土および整地土（約10～40cm、奈良～平安時代）、地山である。以下では（2）十字廊に関連する遺構、（3）十字廊と同時期と考えられる遺構、（4）十字廊建立以後の遺構に分けて記述するが、いずれも奈良時代の整地土および地山上で検出された遺構である。その他、整地土ないしその上層では室町時代以降の遺構として瓦暗渠SX3115、木樋を設置した溝SD3111、十字廊基壇を破壊する近世以降の溝SD3108、SD3109、SD3121、SD3122、SD3123、SD3124、近現代の大土坑SK3133なども確認したが、本概報ではこれらについての詳細は省略する。



第3図 調査区全景（拡張前）

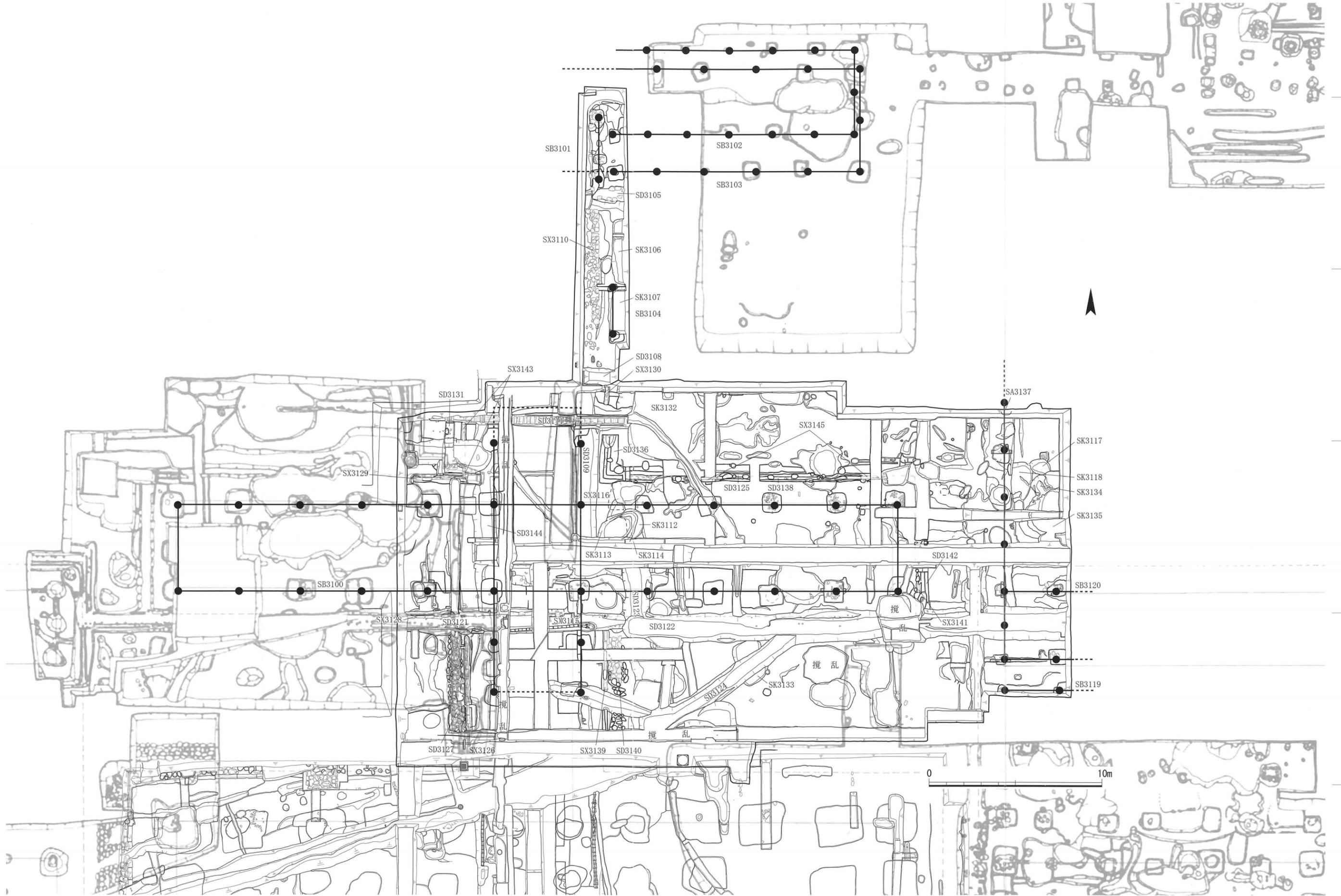
Y-147,560

Y-147,570

Y-147,580

Y-147,590

Y-147,600



第4図 平城第519次調査および周辺の遺構平面図 (1 : 200)

(2) 十字廊の遺構

今回の調査では、十字廊の中央部から東部にかけての基壇および礎石据付痕跡を検出した。調査区内で検出された礎石据付痕跡は21箇所、このうち4箇所は、昭和52年度の調査で検出されていたものである。この結果と過去の成果を総合すると、十字廊SB3100は基壇をもつ礎石建物で、東西廊が桁行11間、梁行1間、南北廊が桁行4間以上、梁行1間、その規模は東西41.7m（141尺、『薬師寺報告』の薬師寺造営尺である1尺=29.6cmとして算出、以下同様）、南北14.5m（49尺）以上であることが明らかになった。『薬師寺縁起』によれば、十字廊の規模は、東西14丈1尺、南北5丈6尺とされるが、今回の調査結果もそれに近い。東西廊と南北廊は、東西廊の中心すなわち東西両側から6間目、南北廊の南から3間目で互いに接続する。

『薬師寺報告』においては、南北廊は接続部より南側に3間、北側に1間と想定しているが、今回の調査では接続部より南に2間北に1間を確認した。ただし、南北廊東面・西面の基壇外装や雨落溝はこれより北または南にさらにのびるため、南北廊については南側に2間ないし3間および北側に1間ないし2間と修正される。また、東西廊の梁行は2間と想定されていたが、東妻中央の礎石据付痕跡は確認できなかったため、1間の可能性が大きい。

柱間寸法は、壺地業の規模が大きいため柱心の位置を特定しにくいだが、東西廊の桁行は中央間が約5.0m（17尺）、その外側各2間が約3.8m（13尺）、両脇各3間が約3.5m（12尺）、梁行は約5.0m（17尺）と想定できる。東西廊は南北廊の南から3間目に接続する。南北廊は、桁行が接続部より北1間で約3.5m（12尺）、接続部が約5.0m（17尺）、接続部より南2間が約3.0m（10尺）、梁行は約5.0m（17尺）である。

基壇外装は、地覆石を用いずに羽目石を直接地面に立てる。羽目石列の外側には、10cm程度の間隔をあけて、十字廊南半では礫敷を施した雨落溝を、北半では素掘りの雨落溝をめぐらす。基壇の規模は、東西廊では、昭和52年度の調査で検出した東西廊西面基壇外装の羽目石外側から今回の調査で検出した東西廊東面基壇外装SX3141の羽目石外側までの距離で、東西44.4m（150尺）である。南北は調査区西部で検出した東西廊北面西側の基壇外装SX3129と東西廊南面西側の基壇外装SX3128の羽目石外側間で、8.3m（28尺）である。いっぽう南北廊では、東西の幅は東面南側の基壇外装SX3139と西面南側の基壇外装SX3126の羽目石外側間の距離で東西8.3m（28尺）である。南北の長さは、南北廊の北端および南端が後世の削平のため明確ではないが、基壇土および基壇外装の残存部分から推定すると、およそ21m（70尺）である。

建物規模は礎石据付痕跡の配置によって、基壇規模は基壇土や凝灰岩製の羽目石を用いた基壇外装、そしてその据付溝および抜取溝の分布によって把握することができた。



第5図 SD3121（右下）・SD3122（左上）によって破壊される十字廊SB3100の南東入隅部（北西から）

A. 基壇

遺構の遺存状況の良い調査区西南部では、現地表面下約30cmで基壇土を検出した。基壇は、特に調査区東半で近代以降の耕作や用水路などにより、大きく削平されている。基壇は版築によって積まれており、調査区西南部の最も残りの良い箇所でも雨落溝底石の上面からの残存高は10cm未満で、標高は60.08mである。東西廊の基壇の南辺や、東西廊と南北廊の接続部の大部分は、中近世の水路あるいは導水管等を埋設するための溝SD3109・SD3122・SD3144により破壊されている（第5図）。

基壇外装とその内外の土層断面観察から把握した基壇の築成過程は、次の通りである。まず、基壇の築成にあたって、地山上の整地土、あるいは地山を10cm程度掘り込んで（ただし、確認されたのは南北廊南端付近のみ）、基壇範囲と周辺とを一体的に整地した後、周辺とは異なる基壇土（凝灰岩の細屑を部分的に多量に含む）を版築によって積んだ後、基壇外装を整える。

整地土および基壇土の厚みの単位は10～15cm程度である。南北廊基壇南端想定位置で地山を掘り込んだ痕跡を確認したが、この層の境界を平面および断面で東西に追跡したところ、整地範囲は十字廊の平面形に合わせたものではなく、付近一帯に広く及んでいた。また、基壇土が礎石据付痕跡の掘方の一部を覆い、掘方を確認できない箇所もあるため、礎石の据え付けと基壇の積み上げが一部並行しておこなわれたことがわかる。

B. 基壇外装とその周辺

基壇外装は、凝灰岩製の羽目石を直接地面に立て並べる形式で、その外側には10cm程度の間隔をあけて雨落溝が設けられている。羽目石を地面に直接立てる形式の基壇は、薬師寺においては、中門や回廊でも用いられている。外装の羽目石そのものを検出したのは、南北廊西面南側（SX3126、第6図）、



第6図 南北廊西面南側の基壇外装SX3126および雨落溝SD3127（北から）



第7図 基壇外装SX3126と雨落溝SD3127の据付状況（北から）



第8図 基壇外装SX3128と下部の瓦片の挿入（南から）



第9図 東西廊南面西側の基壇外装SX3128とその雨落溝
相当位置を踏襲する後世の溝SD3121 (西から)



第10図 東西廊北面東側の基壇外装据付溝SD3138およ
び抜取溝SD3125、雨落溝SD3136 (東から)

同東面南側 (SX3139)、同東面北側 (SX3130)、同西面北側 (SX3143)、東西廊北面西側 (SX3129)、同北面東側 (SX3145)、同東面 (SX3141) である。羽目石列の外側に、それぞれに伴う雨落溝SD3127 (第6図)、SD3140、SD3136、SD3131、SD3142を検出した。また、L字形に接続するSD3138およびSD3125は東西廊北面東側および南北廊東面北側の基壇外装の据付溝および抜取痕跡で、内部からは細かな凝灰岩片や瓦片が出土した。

基壇外装は、基壇範囲の内外におよぶ整地をした後に基壇土を積み、基壇外装の位置に据付溝を掘りこんで羽目石を設置する。SX3126における断割部分での羽目石底の標高は、59.74～.77mである。雨落溝側石の頂部の標高60.05～.08mや、据付溝検出高60.05mを参考にすると、羽目石が埋められた深さは30cm前後ということになる。

羽目石を設置した後、あるいはこれと並行して、雨落溝の据付溝を掘削し、川原石を置く。据付溝の外肩は基壇の外側に施された整地土によって覆われている。なお、一部では瓦片を羽目石の下部に挿入している部分がある (第8図)。これらは、羽目石上端の不陸調整のために意図的になされたものと判断される。

雨落溝は、南北廊東・西面の南側では20～40cm大の安山岩・花崗岩・片麻岩・流紋岩・チャートなどの川原石を敷いて造られている。これらを溝の底面に2～3列敷きつめ、両側に側石をおいて、側石上端を底石上面より15cm程度高くする。南北廊西面北側 (SD3131) および東面北側、東西廊北面 (SD3136)・東面 (SD3142) では石を敷いた痕跡はなく素掘りで、東西廊の北面と南面では雨落溝の仕様が異なる。雨落溝の幅は、東西廊より南側では側石内々で60～70cm、北側では40～50cmである。東西廊南面の西側には、板をあてて杭で固定し堰板とした溝SD3121 (第9図) を検出したが、これは従来東西廊の雨落溝が存在した場所を踏襲し、後世に改修したものと考えられる。SD3121は南北廊



第11図 十字廊SB3100東西廊（東から）



第12図 東西廊南側柱列の礎石据付痕跡の断面（北から）



第13図 東小子房SB3120西北隅の礎石据付痕跡の断面（東から）

の基壇を横断し東方へと続くが、遺構としては確認できなかったものの、排水の便を考えると、南北廊を分断するこの位置にもともと暗渠があった可能性もある。なお、SD3121の護岸に用いられていた板に対する樹種同定および年輪年代調査をおこなったところ、樹種はヒノキで、西暦554年以降に伐採されたことを把握した。ただし、辺材が確認されていないことから、この年代はあくまで上限年代を示すものである。

薬師寺十字廊の羽目石には、薬師寺食堂と同様、二上山山麓や春日山の地獄谷で産出する凝灰岩が用いられており、調査区内の各所に残存していた。特徴的なのは、肉眼およびルーペで観察し、高温型石英の有無に基づいて分類して産地推定をおこなった結果、南北廊西面南側のSX3126に地獄谷産の凝灰岩が集中的に用いられているのに対し、その他の大半の箇所では二上山産の凝灰岩が用いられている点である。食堂では地獄谷産の凝灰岩は基壇南辺における据え替えとみられている（『薬師寺概報Ⅰ』）が、今回の調査で検出された羽目石は、据え替えの痕跡がみられないことからすべて当初のものと考えられる。

また、羽目石の大きさは長さ50～60cm、幅は15～20cmで、長さ1.7～2.0尺、幅5～7寸を基準に刻まれたものと考えられる。傾向としては、東西廊よりも北で検出された石のほうがやや小さい。なお、SX3126やSX3128の羽目石の下部では、鉄製工具で刻んだと考えられる溝が観察されるものがある。運搬の際の紐がかりとして刻まれたと推測される。

C. 礎石の据付痕跡

十字廊SB3100の礎石は調査区内にはまったく遺存していなかったが、1辺1.1～1.5mの隅丸方形の礎石据付痕跡を21箇所（うち4箇所は旧調査ですでに確認済みのもの）で確認した（第4図および第11図）。東北入隅部では、近世の溝SD3109が深く掘り込んでいるため、礎石据付痕跡を検出できなかった。西北入隅部では礎石据付のために壺地業を施した痕跡を確認した。砂質土や粘質土を層状に積む版築

をおこなったり、10cm角程度の瓦片を意図的に敷き詰めたりしている。積土の単位は厚さ10～20cm程度である。場所によっては基壇底面よりも礎石据付穴をより深く掘りこんでいるため、礎石据付痕跡の下部が地山を直接掘り込んでいる部分も見られる。礎石据付痕跡からの出土遺物には薬師寺の創建軒平瓦（6641G）を含む奈良時代の瓦片があるが、平安時代以降のものは見られない。

なお、礎石据付痕跡や壺地業の残存高さ（深さ）は、断面を確認できる場所で最大25～45cm、最小10～15cmであり、残存状態は良好とはいえない（第12図）。基壇土の残存状態とあわせて考えると、具体的な数値は知り得ないものの、遺構の上面はかなりの削平を受けているものと想定される。

（3）十字廊と同時期と考えられる周辺の遺構

東小子房SB3120 西端の桁行1間分、梁行2間分を検出した。棟通りの柱も存在したと考えられるものの、その想定位置は近世の溝SD3122が礎石据付痕跡の底面の標高よりも深く掘りこんでいるため、遺構が確認できない。柱間寸法は桁行が約3.0m（10尺）、梁行が約2.1m（7尺、検出したのは2間分で約4.2m）であり、昭和52年度に調査された西小子房のそれと同一である。

礎石の据付痕跡は、長辺1～1.5m、短辺0.8～1.4mの隅丸方形ないし不整円形で、内部には15～30cm大の川原石を入れこんでいる。残存深さは、確認した部分で8～24cmと極めて浅い（第13図）。SB3120西妻の柱筋は南に並立する東大房の西妻と、北側の柱列は十字廊の東西廊南側柱列と、それぞれ一直線上に並ぶ（第4図）。十字廊SB3100と東小子房SB3120を含めた東僧房が、統一された設計のもとで建設されたことがうかがえる。

なお、東小子房の南側には、2基の柱穴からなるSB3119が検出されている。西僧房の発掘成果を踏まえると、これが大房と小子房の間に位置する付属屋の遺構である可能性もあるが、検出範囲が狭小であるため、詳細は不明である。

南北塀SA3137 東小子房SB3120の西妻の北方で柱筋を揃える掘立柱塀。直径1.0～1.3mの四つの柱穴が並ぶ遺構で、柱間寸法は約2.7m（9尺）である。南から3穴目を断ち割ったところ、深さ60cmの抜取穴の中に10cm～30cm大の川原石や軒平瓦が密に詰まっていた。

前述のように東小子房SB3120の西妻と同一直線状に位置するため、これらと同一の設計下で建てられたものであろう。東小子房北方の空間を東西に隔てる塀と考えられる。

石敷SX3110 十字廊の北方で検出した、南北長さ約6.9m、東西残存幅約0.5mの石敷。西側は近世の溝SD3109で破壊されているが、石の抜取痕跡を残存部分の西側および南側で検出したことから、石敷はさらに西や南に広がるものとみられる。

川原石の東辺は面をそろえており（第15図）、東辺はよく残存して



第14図 東小子房SB3120遺構検出状況（北西から）

いることがわかる。特に東北端では、石の形状がゆるやかなカーブを描いており、それに続く北辺の石も北に面をそろえていることから、北端の位置も確定する。南端は明らかでないが、石の抜取痕跡は、残存している最南端の石よりも1.4m南方まで検出できた。

SX3110と十字廊との間には、後世の溝SD3108が東西を横断するため、両者の直接的な層位のつながりは確認できない。しかし、南北廊東面北側およびその外側と共通する整地土上にSX3110が据え付けられていることから、十字廊と同時期に存在したものと判断した。十字廊基壇との関係は不明とせざるをえないが、基壇北端にとりついていた可能性は十分に考えられる。

遺構の検出範囲が狭いため性格は明らかでないが、南北を結ぶ石敷通路と考えておく。薬師寺伽藍中心部において発掘された石敷の通路としては、講堂から食堂に向かう3列の石敷があり、「講堂・食堂間参道」と呼称されている（『薬師寺報告』）。なお、残存部分を伽藍中軸線（『薬師寺報告』）で折り返すと、東西幅は約7.2m（24尺）に復元でき、講堂・食堂間参道（3.8m）よりもかなり広い。

礎石建物SB3101 石敷SX3110の北方で南北1間分を検出した礎石建物。柱間寸法は約3.6m（12尺）。礎石の据付痕跡はいずれも隅丸方形で、南北ともに南北1.1m、東西0.8m以上の大きさをもつ。この南北柱筋は、石敷SX3110の東辺と礎石据付痕跡の心をほぼ揃えている。北方の礎石据付痕跡には礎石を残すが、長さ26cm、幅22cmと小ぶりである。これらの礎石据付痕跡には根石とみられる15～35cmの川原石が、それぞれ5～10石据えられている。また、南方の礎石据付痕跡は、この上から掘りこまれる礎石抜取穴によって一部破壊されているが、この抜取穴にはSB3101の根石として用いられたとみられる20cm大の川原石を含んでいた。

礎石据付痕跡の検出面は石敷SX3110の北端に接する厚さ約10cmの整地土上であることから、厳密にはSB3101はSX3110よりも一段階後行することになるが、両者の配置を考慮に入れるならば、一連の計画下で造られた可能性も十分に考えられる。SB3101の礎石上面の標高は59.48mであり、これは石敷SX3110の上面の標高である59.17～.24mよりも30cm前後高い。なお、基壇外装に相当する遺構は検出できなかった。

この2つの礎石据付痕跡の伽藍中軸線（『薬師寺報告』）からの距離は、約3.6m（12尺）である。また、東方の既調査区（昭和50年度）では、これと連続する遺構は検出していない。したがって、中軸線から



第15図 石敷SX3110（右）および土坑SK3106（左）（北東から）

ら東西2間ずつ、合計4間程度の建物の可能性が考えられる。一方、南方には石敷SX3110が存在するが、北方へは建物が続く可能性がある。建物の性格は明らかにできないが、十字廊SB3100と石敷SX3110でつながれた、何らかの施設と考えられる。

掘立柱建物SB3102・SB3103 石敷SX3110の北方で検出した東西棟掘立柱建物。検出したのは2基の柱穴で、北方の柱穴が南北0.8m、東西0.6m、南方の柱穴が南

北0.8m、東西0.9m。今回の調査区の東方でおこなった昭和50年度の発掘調査（第1図）で検出した2棟の奈良時代の掘立柱建物と柱列をそれぞれ揃えることから、これらと同一の建物の柱穴と考えられる（第4図）。北方の建物がSB3102、南方がSB3103で、前述の調査によりSB3102が古いことが判明している（『薬師寺報告』）。

同報告においてSB3102は桁行4間以上、梁行2間、柱間寸法がいずれも8.5尺の建物とされていたが、今回検出した遺構により、桁行6間以上、梁行2間、桁行柱間が約8尺の建物と考えられる。また、SB3103は『薬師寺報告』で桁行4間、梁行2間、柱間寸法はすべて10尺の建物とされていたが、今回の検出により桁行5間以上、梁行2間、桁行柱間が約9.0～9.5尺の建物と考えられる。

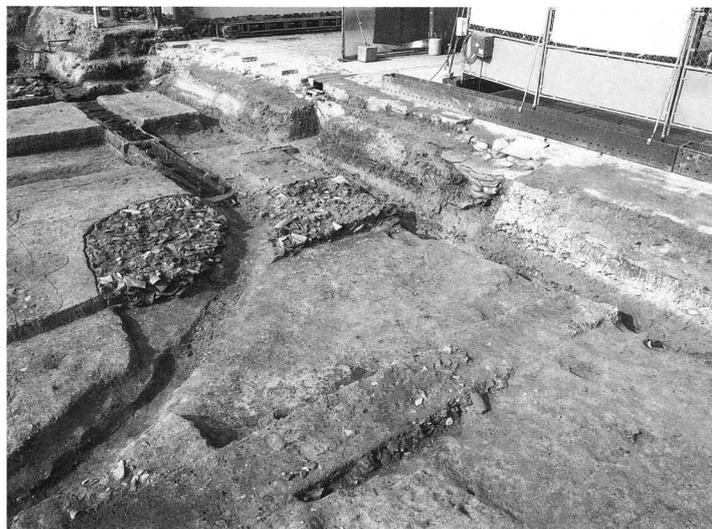
SB3103は今回の調査区内で西妻の柱を検出できなかったため、さらに西方へ続く可能性が高く、礎石建物SB3101とは同時併存しないことになる。SB3102・3103はともに奈良時代の建物であるが、礎石建物SB3101を十字廊と同時期と見なすのであれば、これらの掘立柱建物が十字廊の建立された奈良時代後半以前に遡る可能性も考えられる。

掘立柱建物SB3104 石敷SX3110の南部東方において、これと同一面で検出した南北に並ぶ2基の掘立柱穴で、柱間寸法は2.9m（約10尺）である。柱穴の規模は南北0.4m以上、東西0.4m、残存深さ9cm（北）、南北0.7m以上、東西0.8m、残存深さ29cm（南）。北方ではこれらに組み合う柱穴が検出できなかったため、南方にもう1基柱穴が存在した可能性があるが、想定位置は東西溝SD3108が深く掘りこんでおり、遺構が検出できなかった。東方は既往の調査区を含め建物跡が未検出である。規模・性格は不明であるが、ここでは南北の柱筋を揃えるため、同一の掘立柱建物の柱穴としておく。南北の柱穴ともに10世紀後半の土器が出土した土坑SK3107によって破壊されるため、SB3104はそれ以前のものと考えられる。

（4）十字廊建立以後の遺構

土坑SK3132 十字廊の東北入隅部の外側で検出した土坑。入隅の形状に対応して、雨落溝SD3136から40～80cmの距離を置いて掘り込まれている。東西5.3m、南北3.9m以上の隅丸方形を呈し、検出面からの深さは約30cmである。鬼瓦・軒平瓦・軒丸瓦など、薬師寺創建瓦を含む多量の瓦が、須恵器円面硯や土師器皿など少量の土器とともに極めて高い密度で廃棄されていた（第16図）。

土坑SK3106 北側の拡張区中央部で検出した南北3.8m、東西0.7m以上、検出面からの深さ44cmの土坑。軒平瓦・軒丸瓦など創建瓦を含む多量の瓦が極めて高い密度で廃棄されていた（第15図）。底面近くの最下層では、粉炭が集中する厚さ10～18cmの堆積層がある。



土坑SK3107 北側の拡張区で検

第16図 土坑SK3132（南東から、東半は遺構内部を掘削済み）



第17図 土坑SK3117土器出土状況（東から）



第18図 土坑SK3118土器出土状況（北東から）

出した、東西0.9m以上、南北3.1m以上の隅丸方形の土坑で、残存深さ44cm。黒色土器碗や土師器羽釜など10世紀後半から末頃の土器が、瓦とともに多量に出土した。

土坑SK3117 十字廊の北東、東小子房の北方に位置する、東西1.2m、南北0.9m、残存深さ36cmのすり鉢状の土坑。土師器皿など10世紀末頃の土器が重ねられた状態で多量に廃棄されていた（第17図）。土器をくくった紐などは確認できなかったが、出土状況から、14の廃棄単位が復元できる。

土坑SK3118 SK3117の西に接する、東西1.2m、南北0.9m、残存深さ22cmのすり鉢状の土坑。土師器皿など10世紀末頃の土器が多量に廃棄されていた。出土状況から11の廃棄単位が復元できるが、特にそのうち1つは、ほぼ同形同大の土師器皿を24枚重ねて廃棄していた（第18図）。やはり、土器をまとめた材料は確認できなかった。

土坑SK3112 十字廊SB3100基壇内の東北入隅部付近で検出した土坑。十字廊の基壇および礎石据付掘方、土坑SK3114を破壊し、土坑SK3113によって壊されている。東西1.1m、南北2.0m以上の楕円形で、残存深さ21cm。土器細片、瓦片および多量の炭が出土した。

土坑SK3113 土坑SK3112および後述するSK3114を掘り込む土坑。東西1.6m、南北1.9m以上の楕円形で、検出面からの深さ36cm。瓦器碗など11世紀の土器が、多量の炭や瓦とともに出土した。

土坑SK3114 前述したSK3112・SK3113の下層にある、東西2.2m、南北1.2m以上、SK3113底面からの深さ35cmの土坑。土坑SK3112およびSK3113に壊されている。螺髪と考えられる銅製品および土師器甕・杯など10世紀後半の土器が、瓦片や多量の粉炭、微小な炭化材片とともに出土した。

石組溝SD3105 石敷SX3110の北方で検出した東西石組溝。幅は0.6m～1.0m、東西1.8m分を検出した。礎石建物SB3101の礎石抜取穴によって破壊されているが、石敷SX3110を覆う整地土を切り込んで側石の据付溝が掘られる。底面に石を敷かず、人頭大の川原石を南北の側石として並べている。